

## 巻頭言

院長 東岩井 久

医療にとって20世紀後半は変容の時代であったと云われている。分子生物学・遺伝子研究の進歩やMRIに代表される画像診断の進歩があり、臓器移植や遺伝子治療などが臨床の場で直接応用されようとしている。反面、医療現場では専門分化が進み、テクノロジーが優先し、患者を統合的に見ると言う医療の原点が忘れられがちになっている。医師のパターナリズムはもはや通用しなくなり、情報開示が求められ、医療経済に目を向ければ医療費削減が最重要課題となり病院の生き残り戦争が始まっている。

1999年後半を振り返ってみただけでも介護保険の主治医意見書作成の開始、カルテ開示に向けての病院マニュアルの作成、いわゆるコンピュータ2000年問題、開院70周年記念誌発行及び式典、厚生省と宮城県による特定共同指導等、私共が患者さんの診療以外に対応せねばならなかった種々の問題があった。これらの解決に職員一同真摯に対応し、それなりの成果を挙げていただいたことに心から感謝したい。

仙台市民の健康は保健、医療、福祉の三事業によって守られるわけである。医療を担当する本院の使命は、患者さんが安心して受診でき、満足できる良質な医療を提供することである。そのため求められる事は医療水準の向上を常に目指すことであり、それには教育と研究が不可欠となる。本誌の果たすべき役割がここにあると云って過言ではない。

今、21世紀に向けての医療制度の抜本的改革が始まっているわけで、病院の生き残り戦争にいかに対処していくかが重要な問題となっている。本院が救急センターを持ち、研修医指定病院である事は他院に比し、有利な条件ではあるが、近年の剖検率の低下は憂慮すべき問題の一つである。病院が更なる変革を考える時、職員全体が納得の上、これに積極的に取り組むべきであり、病院の理念にかなった変革を考えて行かねばならない事は言うまでもない。

このような時期に仙台市立病院医学雑誌20巻が刊行の運びとなったことは誠に同慶に堪えない。長沼編集長をはじめとする編集委員の方々に深甚の謝意を捧げるものである。また、本年は病院の顕彰制度が発足して以来初めて医師の該当者が無く、密かに心配していた所であるが、最終的には23編の論文の投稿があり、種々の問題を克服しながら研究や症例をまとめられた方々に満腔の敬意を表するものである。

職員の叡知の結集で仙台市立病院医学雑誌が更なる発展を祈念して止まない。